

視聴覚教材の利用

谷本奈穂

大学教育の改善に関する議論が近年活発になってきている。視聴覚教育の充実もそういう議論のなかに含まれるだろう。

私自身が大学生だった頃には、さほど視聴覚教室や機器を使用しておられた先生はいらっしゃらなかった。視聴覚教材を見た覚えも極端に少ない。ビデオはおろかプリントなどもあまり配布されなかったので、たいていは先生が講義ノートを元にお話されたことを自分のノートに書き写していたように思う。それに比べると、今の大学教育は視聴覚教室や機器が充実しており、環境は改善していると実感する。もちろん、環境の改善がすなわち教育の改善と同じであるとはいえないが、やはり明らかに教育効果はあがっていると考えられる。

さて、私は「コミュニケーション論」を担当しているのだが、そこでは視聴覚教材を多く使用することにしている。また同時に視聴覚教材に頼らない部分も自分なりに決めている。関西大学で行っている「学生による授業評価アンケート」において、私の講義を受講している学生の満足度は高いので、それなりに教育効果があるのではないかと自負している。

具体的にこういった形で視聴覚教材を利用しているかを以下で説明していきたい。

一つは、理論を容易に理解させるために視聴覚教材を使っている。この「分かりやすくする」ことを目指す場合に、視聴覚教材は大変威力を発揮する。

例えばメディア効果論における弾丸理論、特にH・キャントリルが著した『火星からの侵入』を説明するとしよう。キャントリルはオーソン・ウェルズが演出したラジオドラマ「宇宙戦争」を聞いて、火星人が攻めてきたと信じた人々がパニックを起こした社会的事件を分析している。鬼才オーソン・ウェルズはラジオ番組の冒頭で音楽を流し、その音楽を中断して「臨時ニュースを申し上げます」というアナウンサーの声を入れるという演出を行ったために、それを聞いた人々がドラマを本当だと信じたという有名な事例である。

しかしながら、現在の学生にとってラジオドラマを聞いて火星人が来襲したとはとても信じられない話であろう。そこで、講義において私はキャントリルが扱っている事例そのものに関する視聴覚教材を集めた。「宇宙戦争」の音声や、そのドラマを実際に聞いた人たちの証言映像である。また、人々がラジオドラマを聞いたというその「瞬間」の映像は見つからなかったが、ウッディ・アレンの映画『ラジオ・デイズ』の中で、その「瞬間」が描かれているので、その場面だけを見せることもある。そうして、なぜ当時の人々がドラマを本当だと思ったかを、理論的な言葉だけでなく、直感的に分かるように授業を構成している。

二つ目に、こういった理論が「現在」とどうつながっているかを示す教材として視聴覚教材を使うこともある。

ラジオドラマ「宇宙戦争」の放送があった

のは1938年であり、キャントリルの分析は1940年のものである。しかし、こういった理論は、学生にとってみればともすれば「お勉強」ととどまってしまう、それ以上にリアリティを感じられない危険性がある。

そこで、キャントリルが分析して見せた事例が現在でも当てはまる事例を探し、ビデオや画像を用いて学生達に提示している。例えば、現在一般的に報道されているニュース内容とまったく違う内容をもつドキュメンタリーを見せ、「みんなはテレビ報道を信じきってなかったか？」と問うことにしている（更に、そのドキュメンタリーでさえも、実際には製作者の「主観」の産物であることも明らかにする）。こうして、理論を単なるお勉強としてではなく、現代社会にもアクチュアリティを持つものとして、提示していく。

理論を生活実感に結びつけていく作業は大学教育の中で必要なことであると考えており、それには視聴覚教材を（使わないやり方も実践しているが）使うことも多い。

三つ目に、学生にノートをとることを必ず指示するが、そのノートに関わる部分はほとんど視聴覚機器を使わないことにしている。つまりPowerPointなどを使って授業のノートを学生に提示すること（さらにそれをプリントアウトして資料として学生に配ること）はしないことにしているのである。

学生によっては、こちらの講義ノートをPCで打ち出してPowerPointで見せてほしい人

もいるかもしれない（ちなみに一度もそのように要求されたことはないが）。あるいは私の板書の文字が読みにくい人もいるかもしれない。けれど、板書の部分だけはあえて視聴覚教材を使用しないでいようと思っている。

それは私は学生自身が自分の手で文字を書かないと物事を覚えまいだろうと信じているからである。自分で講義のポイントを判断しながら自らの手でノートを取っていく——この作業は重要であると考えているのだ。PC上に打ち出された美しいフォントの文字をスクリーンに流して、何となく分かったような気分になって眺めるだけの学生になってほしくないのである。

こうして、視聴覚機器や教材を多く利用しながら、同時に、利用しない部分も決めつつ授業を構成している。それはノートを取る部分に係わる部分だけはあえて古めかしい講義スタイルをとりつつ、その他の部分では視聴覚教材を多用しているのである。かつての大学教育の利点と、今の大学教育（とりわけ視聴覚教育）の利点をうまくミックスすることが私の目標である。

個人的には、視聴覚機器や教材の力が存分に発揮できるのは、理論を容易に理解させる時であると考えている。その際には、視聴覚機器・教材は不可欠であるといってもいい。これからもそういった視聴覚機器・教材は多に利用していきたい。